



道中だより

第 365 号

平成31年1月24日発行

- ・巻頭 報告
- ・全日中大 文芸
- ・論 寄稿
- ・特別 寄稿
- ・さりが 文芸
- ・後期 情報
- ・事務局 日誌



作品名「静寂の冬の森」(シマフクロウ) 別海町立中春別中学校 藤井 薫



「独創」ということ

北海道中学校長会 副会長 太田 智子

昭和から平成に変わったときよりは、いくらか、心の準備ができる平成31年が明けました。

1月は、新年度経営方針を職員に周知した校長先生も多いかと思います。

教諭の頃は、校長が方針説明をしていますが、あまり理解も出来ず、また真剣に耳を傾けることもなく、若気の至りで、今思うと申し訳ない限りです。

自分のやりたいように教科指導や生徒指導を行い、賛同する仲間と職員室を牽引するかのようない勢いで過ごしていた私は、学校はスタンドプレーではなく、「組織」で動くことが重要であることを認識したのは、管理職になってからでした。

私は、「共創」という言葉を経営方針で使います。

みんなで汗して、「共に」学校を「創る」を併せた造語です。職人に憧れていたためか、「創」という言葉の響きに敏感で、ある局長から、『独創の教育』を紹介され、書籍を2冊貸していただきました。

これからの社会を生き抜いていく子供たちに育むべき資質・能力を「自分らしく、知識やものを新しく生み出したり、すでにあるものに新たな価値を付け加えたりする能力や態度」と捉え、『独創』という研究をした学校の記録です。そして、育てたい子供

像を「自分らしい発想やひらめき、知恵などを生み出したり、友達の発想やひらめきを単に取り入れるのではなく、自分のものとしてアレンジできる子供」とし、そのために、知識や技能を知恵として活用する力や発想力・企画力の育成、画一主義・平等主義からの脱却、コンピュータではなく人間だからこそ考えられること、できることの体験等が示されています。10年前の研究ですが、今、私たちが目指している教育と変わらないことに驚きました。

求める『独創性』とは、自分らしさを核とします。しかし間違っはいけないのは、その自分らしさは、独善性・独りよがり・わがままを意味しないということです。「自分らしさ」は、仲間との関わりの中で、肯定的に自己認識することで「自覚する自分らしさ」へと変容していく、それが『独創』の本質と言えます。

価値の多様化は益々広がります。誰もが『独創性高き人』として育ちゆき、生涯にわたって追い求めてほしいと思います。子供も大人も問題解決の連続の中で生きています。変革の時代にあっても、「浮足立つ必要」はなく、これまでの教育実践の上に立ち、クリエイティブに進んでいきたいと思っています。



第69回全日本中学校長会研究協議会 鳥取（米子）大会報告

第69回全日本中学校長会研究協議会鳥取（米子）大会は「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」を研究大会主題とし、全国各地から2,000名を超える会員が参加し、米子コンベンションセンターを主会場に開催された。

3日間の日程と主な内容について報告する。

〈1日目 10月24日（水）〉

- 11:30～13:50 全日中常任理事会
- 13:00～14:30 全体協議会運営委員会
- 14:05～17:05 全日中理事会
- 15:00～17:00 分科会運営委員会
- 18:00～20:00 歓迎の集いレセプション

〈2日目 10月25日（木）〉

- 9:30～10:20 開会式
- 10:25～12:25 文部科学省説明 全体協議会
- 13:35～16:45 分科会

〈3日目 10月26日（金）〉

- 9:20～9:45 アトラクション
- 9:50～10:10 全体会
- 10:35～12:35 記念講演 閉会式

◆文部科学省説明

「当面する初等中等教育上の諸課題」

文部科学省大臣官房審議官初等中等教育局担当
下間 康行 氏

以下の16点について重点的な説明がなされた。

(1) 第3期教育振興基本計画について

改正教育基本法に規定する教育の目的である



「人格の完成」, 「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」と、教育の目標を達成すべく、「教育立国」の実現に向け更なる取組が客観的

な根拠に基づく政策をもって進める必要がある。

(2) Society 5.0における学びの在り方について

I o Tにより全ての人と物がつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで知識や情報が共有され、分野横断的な連携がなされる社会の実現が近づいている。社会において求められる人材は人間の強みを生かし、AIを活用し知識やプラットフォームを創造する力を有する人である。同時に学びそのものもAIが膨大なスタディ・ログを活用して個の学習状況に応じた内容を提供していくスタイルへと変革していく。

(3) 新たな学習指導要領の円滑な実施に向けて

2021年度からの新学習指導要領実施に向けて、各学校においては、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという社会に開かれた教育課程の理念を十分に理解した上で、主体的・対話的で深い学びの実現とカリキュラム・マネジメントを確立することが必要である。また、小学校における外国語教育及びプログラミング教育の実施に応じ、中学校における教育内容も適切に充実させる必要がある。

(4) 学校教育法の一部改正に伴うデジタル教科書について

2019年4月1日より、教育課程の一部において、通常の紙の教科書に代えてデジタル教科書を使用することが可能となる。また、特別支援教育においては教育課程の全部においてデジタル教科書の使用が可能となる。

(5) 学校における働き方改革の推進について

平成28年度の勤務実態の調査においては、10年前の結果に比べ勤務時間が増加しており、その対応が急がれる現状である。具体的には、ICTの活用による勤務時間の把握と管理の徹底、学校・教師が担うべき業務の役割分担の適正化、教員以外の専門スタッフや外部人材の活用を進めていく。

(6) 子どもの貧困対策と教育の無償化・負担軽減等について

幼児期から高等教育段階まで切れ目のない教育費負担の軽減を目指し、制度と予算において取組が進められている。

(7) いじめ対策・不登校支援について

従前のいじめの定義による解釈による「認知漏れ」の例があり、限定解釈しないことについて周知を徹底する必要がある。

(8) 特別支援教育の推進について

国内の児童生徒数が減少していく中で特別支援学校・特別支援学級の在籍生徒、通級指導を受けている生徒数は増加しており、指導にあたる教員の資質・能力の向上を進めることが必要である。

(9) 日本語指導が必要な児童生徒等に対する教育について

日本語指導が必要な児童生徒数はこの10年間で1.7倍に増加しており、共生社会実現に向けた帰国・外国人児童生徒等教育を推進している。

(10) 性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応等の実施について

性同一性障害に係る生徒については、学校生活を送る上で特有の支援が必要な場合があることから、個別の事案に応じ、心情等に配慮した対応を行う必要がある。そのためには教師自らが性同一性障害等についての理解を深めるとともに、相談体制を充実させ、個の事情に応じた対応を実施することが重要である。

(11) 教師の資質向上について

大量退職・大量採用の時代を迎えるにあたり、教師の養成・採用・研修の一体的な改革を学校、教育委員会、大学、文部科学省が推進し、学び続ける教員の具現化を図る。

(12) 学校安全の推進等について

(災害への対応と危機管理を含む)

危機管理マニュアルについては事前の危機管理の視点から体制整備と全職員が内容について理解するとともに、常に内容の見直しを実施することが重要である。

(13) 学校と地域の連携・協働について

全国の学校のうち14.7%がコミュニティ・スクールを導入しており、児童生徒の学力向上、生徒指導上の課題解決等、様々な効果が表れている。地域と学校の連携・協働は「社会に開かれた教育課程」の実現に寄与するものであり、積極的に推進していく必要がある。

(14) 全国学力・学習状況調査について

学力向上のための学校現場における取組は一定レベルで定着しており、都道府県間の平均正答率の

相対的な差が縮まってきている。2019年度は国語、数学、英語で実施し、従来のA問題、B問題という構成から知識と活用を一体的に問う形式に変更となり、また、英語については「話すこと」をPCとUSBを活用した方法により実施する。

(15) 夜間中学の設置促進について

学齢経過者であって小中学校における就学の機会が提供されなかった者を対象とする夜間中学の設置が地方公共団体に義務付けられている。

(16) 部活動について

運動部活動等への参加率はこの12年間において大きな変化は無いが、生徒数が減少、運動部設置数は変わらないという状況であり、顧問教員の約5割が担当競技の経験がない状況である。2017年には学校教育法施行規則を改正し部活動指導員を制度化、2018年には運動部活動を持続可能なものとするためのガイドラインをスポーツ庁が策定した。

◆全体協議会

■第1研究協議題 全日中提案

学校からの教育改革 全日中教育ビジョン

～生徒指導部の調査研究報告書を通して～

全日本中学校長会生徒指導部長 笛木 啓介

全日中生徒指導部においては、全日中教育ビジョンをもとに5点の推進事項を定めており、今年度は「特別支援教育推進上の課題への対応」に関する調査報告を総括し提案を行った。

(1) 計画的推進と関係機関との連携

生徒指導部の調査によると、小学校とは概ね連携活動が行われているが、高等学校や特別支援学校との連携に課題が存在している。

「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」を活用した個々の生徒への支援の充実を図るとともに、学校と保護者の信頼関係の構築や医療・福祉・労働・相談機関などとの連携協力を進める。

(2) 生徒一人一人の教育的ニーズに応じた支援

個別の指導計画、個別の教育支援計画は約90%の学校が作成し、年に1回以上見直しを行っているが、個別の指導計画は生徒の具体的な目標や指導内容、手だて、評価等が記載されるものであり、年1回の見直しでは回数が少ないと考えられる。

生徒一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細やかな指導や長期的な視点に立った指導を行うため、個別の指導計画、個別の教育支援計画を定期的に見直す体制を構築し、関係小学校や関係機関との連携を深める。

(3) 校内におけるリーダーの育成

発達障害のある生徒の教育を推進する上で困難に感じていることの第一は「指導体制」であり、次いで「専門性のある教員の確保」である。その解決

のために人的配置に関する要望が多く回答されている。

特別支援教育コーディネーターなどの特別支援教育推進のためのリーダーを育成するため、専門性を高める研修を受講させ、資質や力量の向上を図るとともに、リーダーが力を発揮しやすい環境を整える。

(4) 特別支援教育に関わる専門家による支援や人的配置

障害のある生徒への教育支援の充実に向けた外部専門家の活用状況としては、SCや特別支援教育支援員、SSWの活用が進んでいるところであるが、今後は専門医等の医療との連携が一層重要視されると考えられる。

教育委員会に対して、専門家の派遣や教員の加配措置、指導員の配置等の人的措置を求める。

■第2研究協議題 九州地区提案

「蒲江とともに歩む学園」づくりを目指して
～児童生徒の成長に資する

小中一貫校としての取組を通して～

蒲江湘南学園校長 甲斐 徳人

学校の統廃合と小中一貫校の開校を同時に実施した大分県佐伯市の取組について、校長としてのリーダーシップ発揮の視点から実践発表を行った。

(1) 地域・学校の概要

地域の6小学校1分校が統合し蒲江湘南小学校になり、併せて同一敷地内にある既存の中学校との小中一貫校「蒲江湘南学園」（小学生200名、中学生127名、教職員38名）が誕生した。小学校の統合については平成22年の市教委決定から地域説明会を重ね、平成29年度の開校となった。

統合までの経緯から「地域との連携協力体制の確立」は重要な課題であり、同時に小中一貫校としての特色も打ち出すことが求められていた。

(2) 校長としての役割

①方向性の提示、②リーダーシップの発揮、③ミドルアップ・ダウンマネジメントの推進に力を尽くした。

具体的には、①目指す教職員像、重点目標、教育活動の概要を年度初めに提示し、学校全体が進む方向を示し、②職員や関係者の声に耳を傾ける未来志向協調型のリーダースタイルと、校長自身の仕事ぶりを示すことで「チーム湘南」をまとめ上げ、③小中の連携を促進するためにミドルリーダーの主体的な活動を促した。

(3) 具体的な活動

合同運動会、里帰り授業の2点を中心に紹介する。

統合前はそれぞれの小規模校においてアットホームな雰囲気で行われていた運動会を小中一貫

校の特性を生かした形態で実施し、児童生徒が力を合わせて創り上げる過程を皆で共有することで、特に教職員の連帯感を深めることができた。

児童生徒が自分の住む地域において、地域住民との交流活動（作文発表、歌、ダンス、餅つき等）を行い、地域の理解、協力関係の強化を図ることができた。

(4) 成果と課題

学校評価の結果からは児童生徒、保護者、教職員のいずれもが地域との連携において高い評価をしており、一連の活動を肯定的にとらえていることが明らかになった。今後は各種活動の改善、一貫校としてのカリキュラムの整備促進を進めていく。

◆分科会

8つの分科会に分かれ、それぞれの担当地区から研究の取組と成果・課題について提案があり、熱心な研究協議が行われた。

第4分科会：北海道地区

<体力の向上と生涯にわたって運動に親しむ

資質・能力を育てる教育の充実>

・体力向上や健康の保持増進を図る体育・スポーツ活動の充実を目指して

北海道せたな町立瀬棚中学校長 酒井 豊志
・組織的・計画的に体力向上や心身の健康の保持増進を図る教育活動の工夫・改善

北海道函館市立青柳中学校長 松田 賢治

檜山管内校長会

においては、生徒の体力向上を目的に、生徒の体力に関する実態を共有し、アンケート調査によって課題を整理した上で、その解決に向け統一した取組を行っている。具体的には①新体力テストを基にした授業改善、②日常の時間を活用した取組、③部活動の内容改善を進めた。成果として①校長のマネジメントに関する意識の高揚、②生徒の体力の向上、③教職員の協働意識の向上が得られた。

函館市中学校長会においては、生涯にわたって運動に親しむ資質・能力を育成することを目的に、体力向上等に関する実態を把握するための独自の意識調査を実施し、課題を分析した上で、各学校における事例交流を行っている。意識調査の結果からは、①生徒の体力低下に対する学校が果たすべき役割の大きさ、②体力向上のためには人的な資源の強化の必要性、を明らかにした。また、①校内研修の充実、②地域外部人材活用、③保健体育科のシラバス改善等についての事例交流を行うことによ



り、各校が進める体力向上策へ新たな工夫・改善を加えることができた。

◎助言者による講評

二つの提案共に単独校の取組ではなく、地区としての課題を共有し組織的に取り組んできた共同研究であることは大変素晴らしいものである。また、全日中教育ビジョン（改訂版）の健全育成の推進に沿った取組であり、提言2「健全育成」学校・家庭・地域社会の責任分担と連携強化に合致した内容である。「生涯にわたって運動に親しむための教育活動の重要性」を明らかにした研究実践であり、個々の校長の強いリーダーシップと校長会という組織力を生かした内容で、大変参考になる発表であった。

尚、酒井、松田両氏の提案の詳細については会誌「全道中」No.88号（平成31年3月1日発行予定）に掲載される予定である。

また、他の分科会の研究協議題と助言者の講評については次のとおりであった。

第1分科会：東北地区

＜「社会に開かれた教育課程」の編成・実施＞

東日本大震災以降の大きな変化の中で、学校と地域・家庭等との連携を教育課程の編成・実施の中で効果的に進めている貴重な発表であった。

第2分科会：関東甲信越地区

＜「主体的・対話的で深い学び」の実現＞

全日中教育ビジョン提言1「確かな学力」の趣旨に沿った内容で「学習意欲の向上により、確かな学力の伸長」を明らかにし、校長のリーダーシップの下、全教職員が組織的に取り組んだ発表であった。

第3分科会：中国地区

＜よりよく生きようとする意思や

能力を育む道德教育の充実＞

道德教育充実の重要性を明らかにした研究実践であり、校長の強いリーダーシップと教職員を生かすマネジメント力が発揮され、大変参考になる発表であった。

第5分科会：近畿地区

＜未来を切り拓くためのキャリア教育の

視点に立った進路指導の充実＞

自己実現に向けて努力していく力を培う取組など新学習指導要領に示されたポイントを押さえ、校長自身が先を見据え、地域とともに生徒のキャリア教育を推進した大変参考になる発表であった。

第6分科会：九州地区

＜自他の生命を尊重し

自己有用感を育む生徒指導の充実＞

自己有用感の定義を的確に押さえ、学校・家庭・地域・生徒の実態を踏まえ、校長が抱く学校経営ビ

ジョンの「生徒指導」の在り方を具現化した大変参考になる実践であった。

第7分科会：四国地区

＜多様化・複雑化した学校教育課題に

対応できる教員の育成＞

学校や地域の実態に応じて、小中連携を深めながら人材育成を推進し、「学校経営に携われる教員の育成」という視点から育成・評価システムを有効活用し、育成の質を高めた大変参考になる発表であった。

第8分科会：東海北陸地区

＜地域との連携・協働による「チーム学校の創生」＞

校長がリーダーシップを発揮し、チームとしての学校が、多様な地域人材等と連携・協働し、そのつながりを保ちながら学ぶことができる開かれた環境になっていく研究であった。

◆アトラクション 大山僧兵太鼓

鳥取県大山にある大川寺は平安時代より隆盛を極め、その僧兵の勇ましさは戦国大名をも脅かすほどであった。当時の偉業を偲んで昭和51年に復元された太鼓の演奏は地元の住職、旅館や土産物店の経営者で編成され、その勇猛な演奏に場内からは盛大な拍手が送られた。



◆全体会 大会宣言決議

◆記念講演

演題 「夢と冒険～今リーダーに求められる力～」

講師 株式会社モンベル代表 辰野 勇 氏

登山家・冒険家であり、米子・大山観光大使も務める辰野氏の講演は、若き頃の冒険（アイガー北壁登攀）は熱い想いと冷静な計算（リスク管理）に支えられたものであること、経営者に必要な資質である「集中力・持続力・判断力・決断力」は登山やカヌーによって培ったことなどを中心に御講演され、学校経営者たる校長にとって大変参考になる内容であった。



◆閉会式

来年度開催となる群馬県より、群馬県の名物、歴史などを教えるために1947年に作られた「上毛かるた」による地域紹介を含めた挨拶があった。挨拶終了にあわせて、群馬県からの参加者一同が会場の参加者に向かって一礼し、全ての日程を終了した。

〈論 文〉

グローバル社会を生き抜く力を育み、思いやりと活力に満ちた学校の創造 ～地域に根差した活動,世界に目を向けた活動を通して～

千歳市立東千歳中学校 中 村 伸 次

1 はじめに

本校は、北海道の空の玄関口である千歳市の東端に位置する美しい丘陵地帯の景観が広がる中にある生徒数12名の小規模校である。学校が位置するこの東千歳地区は農業が基幹産業となっており、幌加、新川、東丘、協和の4つの自治会で構成されている。この4つの自治体を結ぶ4連合会という組織もあり、地域住民のつながりも強く、学校に対しても大変協力的な地域である。

そうした恵まれた地域環境の中で、これまで「地域に根差した活動」を中心として、基幹産業である農業に関する学習を主に総合的な学習の時間で扱うとともに他教科とも関連付けながら、持続可能な地域社会づくりの担い手を育成する取組を進めてきた。

さらに「世界に目を向ける活動」として、人権や貧困などの地球的な課題に目を向ける学習や活動を行い、「世界の中の地域」という視点を持ち、ますますグローバル化していく社会に対応していくための資質、能力を育むことに活動の展開を広げてきた。ここでは、本校のこれまでの取組について、その一端を紹介させていただく。

2 地域に根差した活動

(1) 農業体験学習

地域の基幹産業である農業について実際に体験を通して学習するとともに食の大切さについても考えを深める取組を行っている。学校農園で主にかぼちゃの栽培を行い、収穫したかぼちゃを地域の秋祭りにおいて販売し、売上金をミャンマーの教育支援に募金している。

(2) 校外清掃活動

小中合同行事として、全児童生徒と地域の環境保全会の皆さんの参加のもと、学校周辺道路沿いの清掃活動を行っている。また、ゴミの不法投棄、ポイ捨てをなくすための啓発看板を文化部生徒が作成し、地域に設置している。この活動は、理科の環境に関する学習と関連付けて実施している。

(3) 下の句カルタ大会の開催

地域の伝統的な文化として根付いている「下の句カルタ」を継承する取組として、市内の適指指導教室に通う児童・生徒や地域の老人クラブ、地元の愛好者の方を招待し、大会を開催し生徒との交流を

図っている。

(4) アイヌ文化学習(小中合同授業)

アイヌ文化振興・研究推進機構に講師を依頼し、北海道の先住民族であるアイヌ民族の文化、歴史を学ぶための全校道徳授業を行い、人権の尊重、文化の多様性の尊重などの価値観を育成している。この授業に関連して、人権擁護委員を講師として人権教室も毎年開催している。

3 世界に目を向けた活動

(1) 募金活動及び国際交流

農業体験活動でかぼちゃを販売した売上金を、ミャンマーの子供たちの教育支援金としてダルニー奨学金を通じて寄付している。支援した子供との手紙での交流を促進し、コミュニケーション力の向上を図るとともに、ミャンマーの現状について調べ学習を行い、地域の秋祭りで情報発信している。

(2) 世界を知る授業

JICA青年海外協力隊の帰国者や日本人学校教員経験者を講師に招き、地球的課題について世界の現状を知る授業を行っている。この授業は社会科の学習と関連付けて実施している。

(3) 地球的課題を考える授業(総合的な学習、道徳)

貧困や人権、紛争の問題など、地球的な課題をテーマにして、既成の教材や自作の教材を用いて授業を行っている。生徒たちに多くの気づきを促すワークショップを実施する中で、批判的な思考力を培うことをねらいとしている。

(4) 英語暗唱大会への参加

千歳市ユネスコ協会が主催する英語暗唱大会に積極的に参加し、英語によるコミュニケーション能力の向上を図っている。

4 成果と課題

多くの外部講師、地域の方々との関わりをもつことで、社会性が生まれ、コミュニケーション能力、物事を多様な観点から考察する力、様々な情報を取捨選択できる力などの「生きる力」が身に付いてきていると思われる。今後は小中連携・一貫教育を推進していく中で、9年間を見通した教育活動を進め、子供たちの豊かな人間形成を図っていきたい。また、平成31年度より小中合同の学校運営協議会を設置する予定であり、CSを核として地域との連携を更に充実させていきたい。

〈論 文〉

「チーム名寄・チーム名中」で取り組む学校力向上

名寄市立名寄中学校 江口 貴彦

1 はじめに

名寄市は、名寄盆地のほぼ中央に位置している人口約27,000人の街である。市内には小学校8校、中学校4校、高等学校2校と道北唯一の公立大学「名寄市立大学」がある。本市は「教育都市宣言」を掲げ、「なよろ市立天文台きたすばる」「サンピラー交流館カーリングホール」など特色ある教育関連施設を完備し、教育に力を入れている。

本校は、伝統校として親しみをもって「名中」の愛称で呼ばれ、地域住民や保護者からの関心が高い。

2 「チーム名寄」の取組

名寄市の小中学校の全ての管理職と教諭との約50名で「名寄市教育改善プロジェクト委員会」（以下「教育改善P」）を組織している。7年前より活動しており、現在は「教育経営の充実」「教育研究（研修）の充実」「教育指導の充実」の3グループに分かれ、名寄市として小中連携やミドルリーダーの育成などの活動を行っている。

(1) 教育改善Pの過去の取組

本年度までの活動で、地域の道徳教材作成や全国体力・運動能力テストの実技研修会など様々な取組を行ってきた中で、最も成果を上げたのが「名寄市学習規律」である。名寄市として10項目の学習規律を定め、小学校1年生から中学3年生まで指導の徹底を図った。この取組は現在も続いているが、各学校でアンケート調査を行い、毎年、その定着を交流している。4つの小学校から生徒が入学してくる本校は、この統一した取組により、中1ギャップの解消の一助となったり、各教科担任も学習規律の指導を継続しやすくなったりしている。

(2) 教育改善Pの今後の取組

前年度から第2次の教育改善Pがスタートしている。学習指導要領の移行期を迎えているため、小学校の外国語や道徳など様々な形で連携を行っている。また、北海道教育委員会の執行方針や名寄市教育行政執行方針に基づき、全市で学校経営計画、学級経営案の様式を統一するなどの活動が予定されている。

(3) その他の取組

本校を含め市内8校が北海道教育委員会の「学校力向上に関する総合実践事業」の実践指定校を受けている。この教育改善Pが機能することで、結

果として実践指定校を受けていない学校も学校力向上に必然的に取り組む形となっている

また、「名寄市いじめ防止サミット」を毎年夏休み前に実施し、市内の小中高の児童会・生徒会の代表が集まり、各校の取組の交流、いじめ防止宣言の採択やいじめ防止標語の表彰などを行っている。

3 「チーム名中」の取組

本校はベテランの教員は少なく、教諭の平均年齢は約37歳で、初任段階教員も職員全体の1/3である。市内近隣高校の多くが定員割れの状況にあり、高校受験は学習意欲の向上にはつながらず、家庭学習の不足による学力低下が課題であった。あわせて学習指導においても、生徒指導においても、組織として若い教員の指導力をどのように育てていくのかということが大きな課題であった。

(1) 学力向上の取組

過去には学年が上がるほど家庭学習を全くしない生徒が増えるという状況にあったが、「高校で苦勞しないだけの基礎学力を」を合言葉に、家庭学習の習慣化のために3年間かけて「家庭学習ノート」の定着を図った。各学年団は毎日、全生徒の家庭学習ノートを点検している。また、チャレンジテストを教育課程に位置付け、その取組を活用して年間のロードマップと短期的なプランを作成、職員に周知して、教育活動の見直しを図っている。

(2) 人材育成の取組

校内研修でベテランが1学期に授業を公開し、2学期に若手が授業を行うなど、全員が授業を公開している。毎回、校内研修の最後には教科単位のメンター研修があり、細かな学習指導や教材の交流などを行っている。また、初任段階教員は、毎年分掌を変え、多くの分掌を経験するように配慮している。

4 成果と課題

学力向上については家庭学習の時間が増え、全国学力・学習状況調査の結果もそれに伴い毎年伸びてきている。人材育成については、職員室内での教員同士の情報交換がとても多く、それが学校や学年で「そろえる指導」となって、若手やミドルリーダーの育ちにつながっている。この「職員室の活性化」を支えているのが「チーム名寄」の取組や教頭やベテラン教諭でつくる職員室の雰囲気である。

課題は山積しているが、今後も組織で生徒を、教師を育てる仕組みを更に充実させていきたい。

〈論 文〉

ふるさとに誇りをもち、たくましく生きる生徒の育成をめざして ～地域の水産業を学ぶ『産業教育』の実践を通して～

稚内市立宗谷中学校 関 根 智

1 はじめに

宗谷中学校は、昭和42年9月に近隣3つの中学校が統合して開校され、本年度で51年目を迎えた。全家庭のおよそ9割が漁業を営む地域性を活かし、漁業の後継者育成を目的とした『ふるさとに学ぶ産業教育』は昭和43年に始まり、伝統を継承しながらも時代に合った課題追求を大事にし、内容を精選して実践してきた。

ここでは、地域との連携・協働を基盤としながら、50年間続けてきた本校の特色とも言える、地域の水産業を学ぶ『産業教育』の実践を紹介する。

2 これまでの経緯

(1) 産業教育の始まり

宗谷中学校にとって、なぜ産業教育が必要なのか。そこには、地域全体に関わる大きな課題があった。開校当時の研究集録には、産業教育を始めるきっかけとなる次のような記録がある。

～漁価は依然として横ばいが続き、しかも漁獲量は年々減少の一途をたどり、今や漁村には産業・経済・文化のいずれも魅力を失い、中卒青少年の全員が、将来をかける「職」をめざして漁村を出て行くのであります。～(研究集録から抜粋)

当時の教職員は、こうした現状を前向きに捉え、地域産業である水産業の研究を教育活動に取り入れることで、地域の水産業を発展させるための知識と技能を生徒に授けるとともに、科学性・合理性を身に付けた後継者を育成することに踏み出した。

(2) 産業教育の変遷(主なもの)

昭和43年度に部活動として水産部を発足、のり養殖の研究を開始する。同年に稚内市から産業教育実践研究学校の指定を受ける。翌年にはホッケやタコの燻製実習を開始する。

昭和48年3月に海水導入施設をもつ臨海実習室(飼育室、実験室)が完成する。

昭和49年度から実習内容を整理し、全校生徒が履修できるよう教育課程に位置付ける。

昭和56年度からはホタテ燻製実習を開始し、現在に至る。

新しい試みと失敗の連続。産業教育はまさに試行錯



誤の連続だったと言える。

3 産業教育のねらいと取組の概要

(1) 産業教育のねらい

- ①地域の方々に学び、適切な人間関係とより良い集団、協働性、地域づくりに貢献する意欲の育成
- ②地域における水産業の役割と誇りを学び、たくましく生きる力の育成
- ③地域の今と未来を広い視野で見つめ、地域を守り持続するために考え表現できる力の育成

(2) 取組の概要

全学年で共通して、タコとホタテの加工・味付け・燻製実習を行うほか、11月には成果を発表する産業教育学習発表会を行う。

第1学年では「漁労」をテーマに学ぶ。宗谷で獲れる水産物と漁法を学習するほか、エビ籠づくりや実習船に乗船して漁体験をする。また、浅海増殖センターを見学する。

第2学年では「製造・加工」をテーマに学ぶ。加工場を見学するほか、燻製のパッケージングを行い、製品を地域等に配布する。配布の際にはアンケート調査を行う。

第3学年では「販売」をテーマに学ぶ。漁組を訪問して聞き取り学習を行うほか、修学旅行の中で販売実習を行う。商品のPR方法や販売グッズを考える学習を行う。

4 成果と課題

本年度に実施した学校評価における『ふるさとへの誇り』についての項目では、全校生徒の96%の割合の生徒が肯定的に捉えていることが分かった。このことから産業教育が郷土愛を育む学習として一定の成果を上げていると分析した。

一方で、産業教育に関わる校内施設の老朽化、昼夜に渡って行われる燻製作業時の教職員の勤務実態については課題である。

5 おわりに

50年間続けてきた産業教育は、確実に地域の中に根付き、後継者の育成や地域の水産業の発展という形で成果を上げてきた。今後も地域との連携・協働を基盤とし、ふるさとに誇りをもち、たくましく生きる生徒の育成をめざして、教職員が一丸となって学校教育を充実・発展させていきたい。

(特別寄稿)

肝心なことは目に見えない

北海道教育大学教職大学院札幌校
特任教授 松 橋 淳

サン・テグジュペリが書いた「星の王子さま」という童話がある。童話と言うより小説なのだが、その中の一節に、狐が王子に秘密を語る有名なセリフが出てくる。「心で見なくちゃ、物事はよく見えないってことさ。肝心なことは目に見えないんだよ。」このセリフ、なかなか教訓的で奥が深い言葉である。私は今でも、悩んでいるときばかりではなく、むしろ逆に、順調に事が進んでいるときや、自信満々でつい有頂天になっているときなど、ハッとして「肝心なことは目に見えない」「心で見なくちゃ、物事はよく見えない」という言葉を思い出し、戒めの意味を込めて、自分に問いかけることがある。

不思議なことに、こうした視点に立って改めて考えてみると、これまで気が付かなかったこと、見落としていた大切なことに気付かされることや、解決のヒントを得られることが実に多い。おそらく、起こっている現象とか、結果とか成績とか数値とか、目の前にある、目に映るものだけで評価や判断をしてしまう傾向が強くなればなるほど、この狐が言う教訓のように、目に見えない大切なものに気付くことに鈍感になるのかもしれない。

実はこの言葉、学校教育や家庭教育にも通じる話であり、教育の一番の肝である、子供の心の中で起こっていることに敏感であるべきと警鐘を鳴らしている。我々教師や親は、前述した、結果とか成績とか数値など、目に映るものをもって子供を評価してしまう傾向が強い。勿論、過程も含めての結果であると考えれば、それはそれで一理あることで、そうした傾向を必ずしも否定することはできない。

でもこの狐の教訓を踏まえるなら、目に映る子供を見る限りにおいては笑顔が絶えず元気な表情で振る舞っていても、内面も果たして表情通りなのだろうか、一旦は疑って考えて見ることも必要なのだろう。常にそうした姿勢で子供と接していれば、ちょっとしたサインにも敏感に気付くようになり、ひょっとしたら目に映らない内面の部分を覗き込むことができるかもしれない。もしそれが人には言えない悩みであったとしたら、違ったアプローチから子供に手をさしのべられることができるのである。我々教師も親も思いは一つ。子供の明るい元気な表情が、どうか子供自身の心の内面から滲み出たそのものであってほしいと切に願うばかりである。

やはり非認知能力が注目される

十勝教育研究所
所 長 高 橋 康 伸

定年退職して3年目を迎える。ここ2年間は幕別町教育委員会に、そして今年度からは十勝教育研究所にお世話になっているが、学校との関わりはあるものの、やはり目の前の子供たちを通じた教育情勢に少しずつ疎くなっているのは否めない。

そんな中、「両親の学歴や収入にかかわらず、子供の自制心や意欲といった非認知能力を高めれば、学力が上がる可能性がある。家庭環境と子供の学力の関連を研究しているグループが6月27日、昨年の全国学力・学習状況調査を基に分析した結果を文部科学省の専門家会議で報告した。」という記事を目にする機会があった。

委託研究を進めたお茶の水大学の報告によると、①「非認知スキル」を高めることができれば、学力を一定程度押し上げる可能性がある。②不利な環境を克服している児童生徒は、ものごとを最後までやり遂げる姿勢や、異なる考えをもつ他者とコミュニケーションする能力等の「非認知スキル」が高い傾向がある。など、興味深い内容が並んでいた。ただ、かつて学校現場にいた者にとっては、それは当然だろうと納得できることばかりであり、「何を今更」とってしまうのである。

国立教育政策研究所が昨年の3月、非認知能力についてまとめた報告書の中でも、「『IQ神話』への疑い」とのタイトルの節があり、EI（感情的知性）など、IQ以外のものが注目されるようになった経緯を丁寧にまとめている。少し前には、EQ（心の知能指数）という言葉が流行ったことも思い出す。

改訂された新学習指導要領では、資質・能力の3つの柱として、①知識及び技能②思考力・判断力・表現力等③学びに向かう力・人間性等が構造的に示されたが、この③に当たるものを非認知能力だと受け止めることもできそうである。

これまでずっと校長会は、学力だけでなく、様々な資質・能力をバランスよく育むことが必要だと言いつけてきたはずだが、ここへきて大学の先生方の研究調査によってようやく実証されたかという思いになってしまう。

やはり、校長の現場感覚を何よりも尊重しなければならないし、改めて、目の前の子供たちの健やかな成長が、全ての原点だと考える次第である。

(特別寄稿)

ばん馬と共に

帯広市農政部ばんえい振興室
室 長 佐 藤 徹 也

「帯広市にしかない、世界で唯一のばんえい競馬」が誕生したのは11年前になる。それまでは道内4市で開催され、人も馬も共に街を移り渡っていった。環境や時代が変われど、馬と共に生きる彼らの生活は変わらない。夜が明ける前から、帯広競馬場内では鉄槌が擦れる音が鳴り響く。段々と日が昇るにつれ、現れるのは、白い息と全身から立ち昇る蒸気によって力強さを際立たせた競走馬たちの姿である。その幻想的な世界観に人々は魅了され、雄大な姿はまさに、北海道の開拓時代を支えた農耕馬が活躍する姿を変え、現代に生き続けていることを物語っている。

近年の帯広競馬場では、昔ながらの常連客のほかに観光客や家族で来られる方が多くなった。そのおかげか、レースで聞こえてくるのは罵声交じりの野太い声に混ざり、子供たちの「がんばれー!」という可愛らしい声援。心なしか、馬も張り切っているように見える。様々な「思い」を乗せて、馬と騎手は人馬一体となって障害へ挑み、その勇猛果敢な姿に会場も一体となって盛り上がる。最後尾の馬がゴールし、お客様から拍手をいただく。こんな競馬場は全国でも、ここだけの光景である。また、地元の幼稚園や保育所、小中学校の中には、学習の一環として競馬場を見学し、職員の説明に一生懸命、耳を傾ける子供たちの姿があり、十勝管外の中学生が修学旅行で帯広競馬場を訪れた際には、想像以上の迫力に皆、驚嘆の声を上げている。

今でこそ安定した運営状況であるが、ばんえい競馬はかつて、存続の危機に陥ったことがある。その危機を乗り越え、今も在り続けられるのは、地元帯広・十勝の方々、全国のファンの支えがあったからであり、そして何より、「ばん馬」がいたからである。競走馬として活躍している馬達の、行き場が無くなったらどうになってしまうのか、想像するに堪えない。存続を希望する声の多くは、「ばん馬」を守りたいという一心から寄せられたものであった。「ばん馬」がいたからこそ、ばんえい競馬を遺すことができたのである。

これまでも、多くの苦難を「ばん馬」と共に乗り越え、ここまで歩んでこられた。私はこの歴史をばんえい競馬に携わる一員として誇りに思い、応援して下さる地元帯広・十勝の方々、全国のばんえい競馬ファンに対し、感謝し続けたい。ばんえい競馬に集う様々な思いを寄せ、多くの課題に取り組み、我々が進むべき次のステージ、そして、「ばん馬」が最も光り輝く場所であるばんえい競馬の更なる高みを目指していく。

文 芸

過疎の町が活気づくとき

せたな町立北檜山中学校
古 俣 みきお

「檜山は世界一素敵な過疎の町」とは、今年、鳥取県で行われた全国校長研究大会で、私達の檜山管内校長会として提言発表したときの原稿でした。この檜山管内は最近16年間で、生徒数は5割減、中学校も半分の10校になりました。こんな中、今年4月、私は自分の育った故郷へ38年ぶりに校長として戻る事となったのです。何はともあれ、この縁に深い感謝の念とともに、懐かしさや喜びの気持ちでいっぱいです。10年前との比較では生徒数が半減しましたが、38年前と比べると、何分の一やら? 比べようとして金庫を開け沿革史を調べましたが、既にその頃から3つの町が合併し、当時からなんと10校が1校に統合され、比較すら難しくなっていました。あまりの変化に驚きを隠せませんでした。街の風景は一変し、メイン通りはシャッターばかりで、寂しい風景となっていました。しかし、この秋、街は若者に溢れ、ものすごい熱気に溢れていました。

それは、9月に行われたお祭りでした。当然、昔も祭はありましたが、出店にせいぜい神輿を担ぐくらいでした。しかし、絢爛豪華な山車(各町会毎、数百万をかけて作成)に子供たちが練習した踊りや太鼓を披露。クライマックスでは、メインの交差点に山車が集まり、盛大な「太鼓合戦」が行われ、集まった人が我も我もと全力で叩くのです。毎年、この太鼓を叩くために故郷へ帰ってくる若者が増え、この時期に同窓会が開かれるようになってきたとことです。子供たちに聞くと「この町が好きだ」という生徒が多くなっています。今年からスタートした学校運営協議会の中では、まさしく今「地域とともにある学校づくり」が求められており、「この町を誇りに思い、この町で働きたい」と思える学校づくり・町づくりを目指していかなければならないと、地域の方々と共に熟議を重ねているところです。





平成28年10月、初山別村に多世代交流拠点施設「繫小屋」がオープンした。地域おこし隊の学習塾、各種サークルの会合など地域コミュニティの場として活用されているとともに、施設内に併設のコミュニティ・カフェでは、地域住民が自慢の腕をふるって料理を提供する企画「ワンデイシェフ」が不定期で開催されている。昨年と今年、私もこの「ワンデイシェフ」の一人として厨房に立ち、管理職となって以来、長年の単身赴任生活で磨いた料理の腕を発揮して、訪れた地域の方々や保護者の皆さん、生徒や先生方に料理を味わってもらった。食べ終わった皆さんからは、素人料理であるにもかかわらず「美味しい!」と“望外”の褒め言葉をいただいた。もちろん、“お世辞”だとはわかっているが、それでも「褒められる」ということはうれしいものである。

このような体験をしてみると、「プロの料理人にとっての料理とは?」ということに興味を湧いた。そこで、アレコレと調べてみると『料理人の心構え10か条』なるものを見つけた。

①料理は愛情、そしてバランスが必要 ②そのときその瞬間は今しかない「メモレ!」 ③シェフは前進あるのみ ④今よりも絶対よいやり方があると自問自答する ⑤シェフは過程よりも結果を求めよ ⑥料理道具は命 ⑦五感を大切に ⑧料理の道は限りない、常に追究し探求せよ ⑨基本があり応用がある!それを忘れない! ⑩ライバルは他店になし!己の中にある!

この10か条を読んでみると「な～るほど」と思うことばかり…。ふと、この10か条を教育に当てはめ

ワンデイシェフ

初山別村立初山別中学校 矢藤典彦

たらどうなる?と考えてみた。「シェフ」を「教職員」、「料理」を「教育」に置き換えると、「教育には、子供を想う愛情とバランス」「教師力の向上を目指し、前進あるのみ」「教育の道には限りなし、常に追究、探求の心をもって」「教材は命」「前年度踏襲、現状維持ではなく、新たな取組を」など、10か条のほとんどが、学校教育の心構えとして十分通じるものだと感じた。

また、美味しい料理を作るために欠かせないのが様々な調味料。どんなによい素材であっても、味付け次第では素材の持ち味が台無しになり、料理としては失格になることも…。素材の特徴をとらえ、これを生かす調味料の選択やそのさじ加減が料理の出来を決める。これを学校で言えば、教職員の特性を生かせるかどうかは校長の腕次第ということになるか?今年度の本校は、複式学級ができて2学級となり、教頭・養護・事務が配置されず、教職員5人に校長という体制。少人数の教職員組織において、教職員一人一人の力量とチームとしての同僚性をこれまで以上に高め、「新学習指導要領実施への適切で着実な対応」や「社会に開かれた教育課程の実現」と「働き方改革の推進」といった取組をいかに進めていくか、校長としてのマネジメント力とリーダーシップが自分に問われている。

料理の腕はさておき、今は教職員を育成する腕を磨き、よい先生を育て、子供が高まる学校づくりこそが優先課題!さて、明日はどの先生のどのような味を引き出そうか?これまた楽し!!である。



実力はまったく伴っていないが、1つのスポーツにのめり込んで、大学もそのスポーツ界でいうところの超一流であり、迷うことなく進学した。まわりは皆、インターハイ上位成績を引っ提げて入学してくる者ばかりであった。私の成績は、精々その8歩も9歩も手前の成績であった。4年間、たいへんだったが、いつしか振り返ると「よかったじゃないか」と自分自身に言えるようになっていた。監督や先生、先輩・同級生・後輩からたくさんのことを学んだ。卒業後の人生において、様々な場面で学びは生かされ、心の支えとなり、自信をもてるようになった。

教師という職業に中学生の頃から憧れていた。担任や部活動の先生がそう思わせてくれたが、それは夢のまた夢であり、志も高くもつことはなかった。しかし、4年生の冬休み明けに進路が大きく変わっていった。監督から、私立高校のコーチのお話をいただき、就職に迷っていた私は即答した。4月から時間講師に就き、その部活動のコーチとなり、授業などについて、先輩の先生方に指導され、必死に勉強して時には略案を求められ鍛えられた。特に、部活動は道内屈指の強豪校で、コーチというよりは高

情熱・愛情・創意工夫

旭川市立東光中学校 赤坂文彦

校生と毎日汗まみれになって練習していた。もちろん、朝トレつきである。大学では3時間は、みっちり練習していたが、それ以上であった。半年が過ぎようとしていた頃、壁にぶつかった。生徒との関係がギクシャクしてきた。原因はすぐに思い当たった。一方通行であった。生徒の心の声に耳を傾けることなく、自分の思いや考えだけで行動していた。

大学の監督は常日頃から「指導者には情熱・愛情・創意工夫が必要不可欠である。」と、お話しになっていた。しかし、23歳の自分は、それを行動や考えに反映することはできなかった。それ以後も、生徒との関係だけではなく、教師として乗り越えなければならぬ壁が、いくつも立ちちはだかるのである。その度に、「指導者には情熱・愛情・創意工夫が必要不可欠である。」と、自分に言い聞かせるのだが、思う結果とはならない。しかし、30歳半ばを過ぎた頃からだろうか、少しずつではあるが、自分の思い描いた結果に、近づきはじめてのように感じてきた。今、振り返ると「指導者には情熱・愛情・創意工夫が必要不可欠である。」と、常にそう思って人生を、教員生活を歩んできたようだ。

後 期 情 報

北海道中学校長会 事務局 局長 高橋 寿輔

○今年度の活動を振り返って

今年度、北海道中学校長会は「つなげ合い、新たな道を拓く 道中」を合い言葉として、全道20地区574名の会員相互の連携のもと本道の中学校教育を推進し、道民の信託に応えるべく活動してきました。

特に本道教育の課題である「社会で自立して生きていく上で必要な学力や体力の向上」に向けて、校長会の使命である「教育の質の向上」を目指し、『チーム北海道』として地域・保護者、関係機関・諸団体の御理解と御協力、御支援をいただきながら、授業改善と学校改善に粘り強く着実に取り組んでいるところです。

昨年9月21日・22日に開催した第60回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会は、4か年継続研究の研究主題「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」の3年目として、「恵み豊かな十勝から 次代を担うきらめく子らの 想いをつむぐ学校経営の充実」を副主題に据え、全道各地区の成果と課題を持ち寄り、熱心な研究協議がなされました。主管された帯広市校長会、副主管として御協力いただきました十

勝小・中校長会の皆様には改めて感謝を申し上げますとともに、今大会の成果が、来年度岩見沢市で開催となる第61回空知・岩見沢大会に引き継がれることを願っております。

また、これまで道中組織の見直しを進めてきた中で、組織運営の面では全道各地区の支えを得ながら『チーム北海道』として新たな道中体制での2年目の活動を終えようとしています。これからも乗り越えるべき課題は山積みですが、新学習指導要領の実施や働き方改革へ向けた対応をはじめとする教育改革の動向をと見定めつつ、「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」に基づく研究推進を通し、本道の中学校教育の振興に努めて参りたいと思っております。

今後とも御理解と御協力をよろしくお願いたします。

○来年度の事業計画について

来年度の事業計画は、2月に開催される第6回理事研修会を経て、4月の総会で決定となります。

随時、道中HPにも掲載しますので御覧置ください。

受賞おめでとうございます

平成30年度文部科学大臣表彰（教育者表彰）を受賞されました。

☆ 橋本直樹 校長（北海道中学校長会会長 留寿都村立留寿都中学校）

道中事務局日誌

月	日	曜	業	務	時間	場	所	月	日	曜	業	務	時間	場	所
10	9	火	北海道中学校体育連盟副会長会	(笹川)	10:30	北海きたえーる		11	9	金	道中研全体研修会(引継ぎ会)	(十勝・帯広事務局, 空知・岩見沢事務局, 五役, 研修部)	15:30	ライフォート札幌	
10	10	水	第6回事務局研修会(五役, 筆頭副会長, 幹事, 専任職員)		10:30	ばらと北1条ビル		14	水	第10回小中合同研修会(五役)		10:00	道 小 事 務 所		
			十勝・帯広地区教育経営研究会(高橋, 庄司)		12:50	豊別阿百年記念ホール					平成30年度男女平等参画審議会専門部会(木村)		15:00	道庁本庁舎塔屋	
			第2回部活動関係者会議(橋本)		14:00	第2水産ビル					道中第4ブロック研修会(橋本)		14:00	札幌駅前サテライト	
			道教職員互助会第6回特別会員事業検討委員会(法本)		14:30	教職員互助会会議室		15	木	日本教育会北海道支部第2回理事研修会(高橋, 和田)		15:00	ライフォート札幌		
			道教育大教員養成改革推進外部委員会(和田)		10:00	札幌駅前サテライト		16	金	道中第4ブロック研修会(橋本)		14:00	札幌駅前サテライト		
			第9回小中合同研修会(五役)		15:00	道 小 事 務 所		19	月	新しい形の知的障がい特別支援学校高等部への移行にかかわる意見交換会(橋本)		10:00	道 中 別 館		
			道中事務局OB会(高橋, 和田, 新沼, 法本, 専任職員)		18:00	ポールスター札幌					小中学校免許状併有のための認定講習検討会議(新沼)		13:30	道 庁 別 館	
			第43回全国教育大会奈良大会(橋本)		10:00	なら100年会館					日本教育公務員弘済会北海道支部第2回幹事会(高橋)		18:00	ライフォート札幌	
			空知地区教育経営研究会(橋本, 岩田)		13:00	13:00		21	水	第2回時間外勤務等縮減推進会議(橋本)		9:30	第2水産ビル		
			北海道・道央ブロック更生保護研究大会(尾崎)		10:30	教育文化会館					平成30年度北海道地域学校協働活動推進協議会兼コミュニティ・スクール連絡協議会現地視察(三浦崇)		13:30	砂川市公民館	
			ユニセフ・ハンド・イン・ハンド街頭募金(尾崎)		13:00	大通りビッセ		22	木	全日中臨時常任理事会(橋本)		13:30	全 日 中 会 館		
			小中学校事務職員の果たす役割等に係る検討会議(三浦崇)		13:30	道庁階上7F教育委員会		29	木	第17回全道かべ新聞コンクール本審査(木村)		10:30	北海道新聞社		
			北海道教育会議・運営委員会(橋本, 高橋)		14:00	かでの2.7		12	1	土	道P第3回常置委員会・第2回理事会・役員理事懇談会(佐藤)		13:00	ポールスター札幌	
			北海道中学校体育連盟常任理事会(笹川)		10:30	北海きたえーる		13	火	第13回北海道中学生演劇発表大会(木谷)		13:45	札幌市教育文化会館		
			道P第4回役員会・第3回正副委員長会・第2回常置委員会・道教委との教育懇談会(佐藤)		10:00	ポールスター札幌		2	日	北海道青少年科学技術振興作品展表彰式(三浦利)		13:00	札幌市青少年科学館		
			道P運営戦略プロジェクト(佐藤)		10:00	ポールスター札幌		7	金	第7回事務局研修会(五役, 筆頭副会長, 幹事, 専任職員)		15:00	ばらと北1条ビル		
			全日中常任理事会(橋本, 全日中理事会(橋本, 高橋, 木谷, 蓮本)		11:30	米子コンベンションセンター		12	水	岩田・アメト肢体不自由児育英基金管理運営委員会(三浦利)		13:30	かでの2.7		
			歓迎の集い・レセプション(橋本, 高橋, 木谷, 蓮本)		18:00	米子コンベンションセンター		17	月	北海道青少年健全育成審議会(岩田)		13:30	道 庁		
			北海道子どもの生活習慣づくり実行委員会(大村)		14:00	かでの2.7		18	火	北海道教育功労者表彰式(橋本)		11:00	ライフォート札幌		
			第69回全日中研 鳥取(米子)大会(五役, 副会長, 木村, 安達, 辻野, 室山, 海野, 木村, 越田, 三浦崇, 庄司, 山田)		9:30	米子コンベンションセンター					「第5回北海道食育推進優良活動表彰」表彰式・講演会(庄司)		14:00	ポールスター札幌	
			第69回全日中研 鳥取(米子)大会(五役, 副会長, 木村, 安達, 辻野, 室山, 海野, 木村, 越田, 三浦崇, 庄司, 山田)		9:20	米子コンベンションセンター					北海道教育実践表彰選考会議(岩田)		15:00	道 庁	
			第1回北方領土学習資料編集委員会(佐藤)		13:00	札幌ガーデンパレス		20	木	どさんこ食育推進協議会(庄司)		14:00	第2水産ビル		
			五役研修会(五役, 専任職員)		10:30	道中事務局		25	火	全国育樹祭北海道実行委員会第1回総会(立花)		14:00	札幌ガーデンパレス		
			第2回奨学生選考委員会(三浦利)		13:30	札幌ガーデンパレス		26	水	北海道・札幌市公立学校採用に関する協議会(高橋)		15:00	S TV北2条ビル		
			北海道教育の日制定記念行事(橋本, 高橋, 和田)		15:00	ライフォート札幌					道教育大教員養成改革推進外部委員会(和田)		15:00	札幌駅前サテライト	
			北海道中学校体育連盟理事会(橋本)		10:00	北海きたえーる					アレルギー講習会(学校における普及啓発講習会)(山田)		13:30	東京四谷区民ホール	
			道特協経営大会室蘭大会(橋本)		9:00	室蘭市・蓬映峡		1	7	月	第46回中学生作文コンクール中央表彰式(橋本)		13:00	北洋銀行大通センター	
			北海道青少年科学技術振興作品展に係る審査会(三浦利)		13:00	室蘭市・蓬映峡		11	金	北海道学校給食研究協議会支部長・センター長等会議(山田)		9:30	ポールスター札幌		
			第46回中学生作文コンクール最終審査会(木村)		14:00	毎日新聞社北海道支社		22	火	第11回小中合同研修会(五役)		10:00	道 小 事 務 所		
			運営委員交流会(橋本, 高橋, 法本, 小澤保, 宮本, 小澤洋, 西川, 大山, 東海林, 専任職員)		10:30	道中事務局		24	木	道P第1回広報誌コンクール審査会(佐藤)		10:30	北海道新聞社		
			第5回理事研修会(五役, 副会長, 運営委員, 地区理事, 事務局員, 専任職員)		13:30	ライフォート札幌		25	金	全日中常任理事会(橋本)		13:30	全 日 中 会 館		
											全日中理事会(橋本, 高橋, 蓮本, 和田)		10:00	オリピックセンター	

北海道中学校長会

発行者 会長 橋本 直樹
編集者 道中情報部

事務局 札幌市中央区北1条西3丁目
敷島プラザビル4F
TEL011-251-1344 FAX011-251-1302
http://www.dochu-kochokai.jp

本誌の発行にあたっては、作成方法等の見直しにより経費の削減に努めています。